

# ナマステ



特定非営利活動法人  
自然文化誌研究会 会報誌

## 158号

2025年3月20日発行号

## 第21回通常総会を開催しました！！

昨年に引き続きオンラインでの開催となりました。総会の詳細についてはホームページに掲載しますので閲覧が可能です。

### <2025年主催事業の予定>

日付	事業名	開催場所	定員	備考
4/20 (日)	野草のてんぷらとお茶つみの会	東京学芸大学環境教育研究センター(農園)	なし	※最終ページでご案内
5/3-5	冒険学校むらまつりキャンプ	小菅村	25	6ページでご案内
6/21	自然文化誌研究会50周年記念① 座談会「学術探検と環境学習の創造」	Zoomで開催	なし	
8/2-8	こすげ冒険学校	小菅村	25	小学3年～中学3年
8/17-24	タイ環境学習キャンプ	タイ王国	15	
9/27-28	INCHまつり(ライブ)	小菅村	30	
10/4	自然文化誌研究会50周年記念② 「50周年記念の会」	東京学芸大学環境教育研究センター(農園)		第一部テーマ：「INCHと私の今までとこれから」 第二部：農園で交流会(宿泊可能です)
12/26-28	冒険学校まぶゆのキャンプ	小菅村	15	

新たに理事として菱井優介氏、運営委員として大友憲大氏、熊木日向氏、森住芽衣氏が就任しました。

## 冒険学校『むらまつりキャンプ』 5.3～5.5 (2泊3日) 開催します！！

新緑がまぶしい、多摩川源流の小菅村でキャンプを行います。清流での川遊び、焚き火、山菜採り、テント泊、野外調理、五右衛門風呂など、多くのプログラムを準備しております。小菅村の「多摩源流まつり」もあります。ご家族での参加も可能な、ゆったりとしたキャンプですよ～！！



日程：5月3日(土)～5日(月)(2泊3日)  
 場所：小菅村 清水バンガロー(いつものキャンプ場)  
 対象：子どもだけの場合は小学校3年生以上、  
 親子参加の方は幼児もOKです。  
 宿泊：テント+寝袋が基本になります。  
 参加費：※猿橋(奥多摩)駅～小菅村間の交通費を含みます。  
 子ども：会員¥25,000 非会員 27,000円  
 親子一組：会員¥34,000 非会員 40,000円

※先着順で25人の定員です、お早めにご予約ください！！  
 ※これ以外の組み合わせの時は、ご相談ください。  
 ※会員になると、今回から会員料金で参加できます。  
 ※参加希望者は、ハガキ・もしくはE-mailに住所・氏名(ふりがな)・年齢(学年)・性別・電話番号を記入の上、4月25日(金)までに事務局までお申し込みください。

<令和6年度国土緑化推進機構「緑と水の森林ファンド」助成事業です>

# 第20期サークルちえのわ活動報告

第20期代表 佐藤太佑（東京学芸大学 3 回生）

東京学芸大学「サークルちえのわ」です。20期の活動報告をさせていただきます。

## 【ちえのわ農学校とは】

「サークルちえのわ」は東京学芸大学のサークルであり、メンバーの大学生は教育・自然体験・農体験に興味を持って集まりました。「ちえのわ農学校でしか出来ない体験をしてほしい」という想いから、「ちえのわ農学校」を地域の子どもたちに向けて開催しています。そんなサークルちえのわは、3つの“わ”を理念として4月から翌年1月まで毎月1回(全 今年9回)の活動を行っています。

- \*自然のわ：自然の様々な表情と向き合いながら、「種から胃袋まで」の道のりを五感で感じるきっかけづくりをする。
- \*人のわ：農学校だからこそ出来る体験を通じて、子どもたちが仲間やスタッフとのつながりを感じられるきっかけづくりをする。
- \*知恵のわ：昔から受け継がれてきた知恵や文化にふれ、身近なものを見つめなおし発見するきっかけづくりをする。

以上のことを基本理念とし、本年度は「環境教育研究センター農園でできることを行い、学んだことを次につなげる」ことを具体的な目標として行いました。環境教育研究センター農園だからこそできる活動を行い、子どもが何か感じたことや学んだことなどを持ち帰って新たな視点や興味につなげていければと思い活動を行いました。

## 【本年度の活動報告】

本年度も昨年度に引き続き、食品を扱う活動を行えたのでより作った作物をどう生かすかという点で大きく活動の幅を広げることができたと思います。畑では四季折々の作物を育てることで、作物を育てること以外にも季節の変化を存分に感じることができました。実際に大学生と共に作業を行うことで、最初は難色を示していた子供も次第に興味を示し、協力して取り組むことができました。田んぼでは、例年通り米作りを行いました。様々なことがあり、毎年同じことを行っているのにもかかわらず本年度も前途遼遠であると感じました。双方とも自然を相手にするので思い通りにいかないことは重々承知で皆活動を行っていますが、いざ問題に直面した際に茶を濁さずどうしていくのかが今後の課題だと感じました。子どもたちだけでなく我々としても様々なことを学んだ有意義な一年であったと感じています。以下に本年度の活動を記載してあるが、私のような稚拙な文才では綴りきれないほど内容の濃い一年間であったため、ぜひINCHのキャンプに参加するサークル員に話を伺ってみたいところです。サークルとして、個人としてどう感じたのか、何を学んだのか人それぞれ異なる収穫があるため、とても面白い話がもらえると思うので、酒の肴にでもするのはいかがでしょうか。



## 【第 20 期活動内容】

<b>《第 1 回：4/20》</b> ・開校式 ・アイスブレイク (ito) ・(田) 農園散策 ・(畑) たけのこほり	<b>《第 2 回：5/18》</b> ・(田) 田植え ・(畑) 整備、苗植え ・(季) お茶摘み
<b>《第 3 回：6/15 (1 日農学校)》</b> ・(田) かかしづくり ・(畑) 整備、苗植え ・(季) 流しそうめん、梅シロップづくり	<b>《第 4 回：7/20》</b> ・(畑) 夏野菜の収穫 ・ピザづくり ・葉書づくり
<b>《第 5 回：8/24》</b> (熱中症予防のため中止)	<b>《第 6 回：9/14》</b> ・(田) イナゴの佃煮づくり ・(畑) 苗植え ・(季) お月見団子づくり
<b>《第 7 回：10/26 (1 日農学校)》</b> ・(田) 稲刈り ・(畑) 冬野菜クイズ ・(季) かぼちゃパイ	<b>《第 8 回：11/16》</b> ・(田) 脱穀、唐箕、粳摺り ・(畑) 足湯 ・(季) どんぐり工作
<b>《第 9 回：12/21》</b> ・(田) わら工作、薫焼きおにぎり ・(畑) 冬野菜の収穫 ・(季) イルミハイク	<b>《第 10 回：1/25》</b> ・(田) もちつき ・(畑) 収穫、畑の清掃

## 【随筆-第 20 期を振り返って-】

ある日、こんな言葉を目にした。「夢見た未来や希望に裏切られ、日々何かが失われるのを感じ続けている。(中略)昨日の打算、今日の妥協が未来を、自分を食い潰して行くのを予感しながら、何処へ向かうとも知れない道を歩き続ける…。」陶酔していたこともあるかもしれないが、私にはこの言葉がひどく残った。本年度を振り返ると挑戦と挫折の一年であったと感じる。新しいことを多方に展開できたことは非常に良い経験であった。もちろんそのすべてが上手くはすもなく多くの妥協と打算を繰り返してきたと感じる。第 20 期としての選択が次代に何か残ればと思いつつ、次の選択を楽しみにしていきたい。

最後に農学校に参加した子どもスタッフ、学校関係者各位、INCH の方々その他大勢の協力のおかげで農学校が開催できたことに誠意の意を表します。今後ともサークルちえのわをよろしく願いいたします。

## 【2025 年度の活動予定】 ※2025 度の申し込み締めきりは 3 月 31 日 (必着) です

2025 年度の予定は、月 1 回の土曜日 (全 10 回) 13:00~17:00 (夏期は時間をずらす場合があります)、6 月は 2 日かけて行う予定です。参加対象は小学校 3 年生~6 年生、参加費は 15,000 円 (年間費)、ちえのわ農学校を主催する「サークルちえのわ」に早めにお問い合わせください。4 月 19 日 (土) に開校して、田植えから脱穀・精米までの稲作体験果物の調理・保存自然を対象にしたあそびなど 1 年を通して開催します。

※日程や活動内容は変更する場合があります。ちえのわはホームページ、Instagram でも活動内容を発信しております。



「サークルちえのわ」HP



ちえのわ Instagram

## 宮本茶園 宮本透

上野原市立病院治療を受けている心臓は服薬のおかげで日常生活の中では息切れする事が無くなりました。昨年12月の診察で主治医の先生は「このところ症状は落ち着いているので、入院して内視鏡手術を受けませんか？今飲んでる薬を減らす事ができますよ」と言われます。破天荒な人生を歩んだ若き日の私は肺炎・髄膜炎・交通事故と生死をさまよう長期入院を繰り返し、極め付けは精神を病んでの強制措置入院、閉鎖病棟の獄中生活まで経験しています。監獄のように監視カメラが設置された鉄格子の病室で過ごした数週間の記憶はその後の人生にトラウマとして残りました。入院の黒歴史が頭の中によみがえり手術決断までに時間がかかりましたが、1月下旬のゴエモン佐野川チーム醤油仕込みや2月の茶園寒肥作業が始まる前に手術を受ける事にしました。

正月明けに入院、翌日昼頃点滴から麻酔を打たれて手術が始まり夕方病室ベッドの上で目が覚め、3日目昼前には退院、拍子抜けするほどあっさりと自宅に戻りました。カテーテルを入れた傷口の痛みが消えるまでのんびり過ごし、順調に野良仕事へ復帰する事もできました。手術1か月後の上野原市立病院診察室、先生に「手術して重い肥料袋を楽に運べるようになりました。いつまで元気に野良仕事できますか？」と質問すると、「定期的に診察を受けていれば、当分の間は大丈夫ですよ。ただ心臓は突然悪くなるので、その時はまた治療法を考えましょう」と言われます。人生の残り時間はどれだけあるかわかりませんが、後継者育成を考えながら野良仕事を楽しみます。

### ・冬の茶仕事

茶草場農法の宮本茶園は秋の終わりから冬の間は山の落葉や茅場のススキ・近隣農家からいただくワラ等、有機資材を茶園畝間に敷き込み続けます。千木良のヤギ苑から大豆殻を運ぶ作業は私にとって冬の風物詩です。昨年は猛暑の影響で12月になってようやく大豆を収穫した農家も多く、ヤギ苑の脱粒作業は12月半ばまで続けました。ちーむゴエモンは大豆栽培に取り組みチームが増え、大豆殻がうず高く積み上げられています。年末から2月半ばまで大豆殻をネットに詰め込んで軽トラで搬送、回を重ねる毎に低くなる大豆殻を眺める事を励みに作業に取り組みました。やり遂げた達成感はこの歳になっても素直に嬉しいです！(写真①②)

夏に更新剪枝した茶園は秋整枝をせずに枝を伸ばしていますが、先端をシカが食べています。佐野川ではシカの食害は深刻で大豆や野菜は畑の中に入れ丸坊主にされていますが、これまで茶葉は食べられた事はありませんでした。藤野茶業部では初めての事例、県農業技術センターの先生たちが被害状況調査に上岩茶園を訪ねて下さいました。県西地区の茶園でもシカの食害被害が出ているとの事で、対策については「電気柵設置が一番効果的です」と言われます。赤字経営の宮本茶園にこれ以上の設備投資は難しく、野生動物との闘いは頭の痛い問題です！

引き続きは営農指導、中切り更新した茶園の管理について相談しました。肥料は今年摘採予定の茶園と同量を施しているの順調に樹勢回復していますが、枯れた枝や幹に苔が生えた古株が所々に散見します。「ハチやマムシがない季節に取り除けば、見違えるほどきれいな茶園になりますよ」との助言、寒空に震えながらのこざりと剪定鋏を持って株元から枯れた古枝を切っています。最近佐野川の茶栽培の歴史を調べているのですが、この茶園は藤野町で1967年に始まった茶栽培事業の指導圃場で、由来を記した石碑が建立されています。元祖佐野川茶の由緒ある茶園、指導圃場の名を汚さないようにいねいに管理しています。(写真③)



①



②



③

### ・第57回神奈川県茶業振興大会

昨年12月神奈川県茶業振興協議会より「第57回神奈川県茶業振興大会における受賞登壇について」という文書をいただきました。登壇者名簿を見ると「宮本 透 神奈川県茶園共進会二等」と記載されています。受賞茶園は長らく更新剪枝をしておらず、割り箸のような細い枝が絡み合っ葉層が薄く低品質の生葉しか収穫できませんでした。2021年4月摘採前の茶園巡

回指導では県農業技術センターの先生から「この茶園の茶葉は品質が悪く足柄茶に出荷しても損をするだけなので、収穫しないで刈り捨てなさい」と言われ、茶葉を摘採せずに中切り更新剪枝したのでした。2021年夏肥からは茶来未佐々木社長より紹介された静岡県の肥料会社の茶樹専用肥料を購入し、高品質の茶葉生産に取り組んできたのです。2018年小池茶園・2020年大河原茶園に続く茶園共進会2等、3年間の苦勞が報われ感無量でした！長年にわたって茶園管理指導をしてくださる県農業技術センターの先生や藤野茶業部の先輩農家、たくさんの方々の励ましと応援があつての受賞、今後も精進続けます。

1月28日清川村生涯学習センターで第57回茶業振興大会が開催され、久しぶりにネクタイを締めスーツで身を包み緊張した面持ちで褒賞授与式に臨みました。登壇者席にはこれまで目標にしてきた秦野市や山北町の茶農家が並んで座り、改めて受賞の意味と重さをかみしめました。タウンニュース社の記者が取材してくださり「佐野川茶 県品評会に市内4点入賞」と2月6日付紙面に報道されました。掲載記事の影響力は大きく、地域の方々から「記事読んだよ、おめでとございます！」と声を掛けていただき、販売店舗の売り上げも伸びています。

### ・ちーむゴエモンの活動（2025年冬）

《醤油仕込み》 佐野川チームは平塚養護学校元同僚の小華和さんが退会する事になり、今年は新メンバーを募りました。相模湖・ダム建設殉職者合同追悼会事務局長の古澤さんをお誘いして、親子で活動に参加してもらっています。古澤さんの息子さん④は小学4年生、7月の追悼会では会場設営や飾花を担当しています。佐野川チームに入ってからヤギ苑での製麹作業、醪仕込みに使う軍刀利神社の水汲み、雑穀畑の麦踏み等、農体験に興味を持って積極的に活動しています。醪の手入れの日は学校帰りに上岩まで出向き、全ての作業を担ってくれるので私は傍らで眺めているだけです。「種から胃袋まで」の農耕文化基本複合を学び始めた小学生、野良仕事の楽しさを存分に味わってもらいたいと思います。今後の活躍を期待しています！（写真④）

《小麦製粉》 上岩雑穀畑は雑穀とゴエモン佐野川チーム醤油仕込み原料の大豆と小麦を栽培してきました。小麦は瀬谷君からいただいた「ユメアサヒ」を2畝作付けし、30kg程収穫しています。醤油麹用に7kgと播種用に2kg残して、残りはJAクレインの製粉工場で小麦粉に加工していました。今年も醤油仕込みを終えて製粉工場に出向くと「工場休業のお知らせ」が掲示されているのです。機械操作担当者が体調不良で再開の目処は立たないとの事、高橋師にお願いしヤギ苑の製粉機を使わせていただき製粉する事にしました。

作業には古澤さんの友達のパン屋さんが参加、10時半作業開始で一番粉を挽いた後、全粒粉とフスマをもう一度挽いて二番粉を取りました。12kgの小麦は一番粉6.5kg・二番粉4kg・フスマ1.1kgになり、作業終了は16時半でした。小麦製粉はとても手間のかかる仕事だとわかり、スーパーマーケットで小麦粉が手軽に買える豊かな日常生活に感謝しています。小麦粉とフスマはパン屋さん⑤に取引していただきましたが、一日がかりで挽いた小麦粉を使って焼かれたパンの味、とても楽しみです。（写真⑤）

《味噌作り》 ゴエモン恒例行事の味噌作り、6回目の麹仕込みを請け負いました。毎年白米の麹にしませんかと提案するのですが、玄米麹が好きな方の要望で今年は久しぶりに分つきをしない玄米14kgを麹に仕込む事になりました。発芽玄米にすべく高橋師が5日間浸漬したのですが、水温が低いためか芽は出ませんでした。水切りした玄米をセイロに入れ蒸気が通ってから1時間半、半透明でモチ状に潰れるようになった米粒を冷まして種麹を床もみします。玄米麹は食品加工の教科書に載っている白米麹と違って品温管理が難しく出麹までの時間が長いので、4日間数時間おきにヤギ苑の製麹室に通って品温が40℃を超えないよう気を使いました。途中油断して高橋師から室温を下げる吸気処理をしたと連絡いただいた時は、精進が足りない事を受け止め師匠の偉大さを改めて感じました。無事出麹した玄米は今年もたくさんの仲間が味噌に仕込んでくださり、肩の荷が下りました。（写真⑥⑦）



④



⑤



⑥



⑦

# 『自然文化誌研究会 50 周年記念』のご案内

2025 年に自然文化誌研究会の 50 周年記念事業を開催します。昨年より検討を重ね 3 本柱で開催となります。日程・内容は既に決まりましたので関係者のみなさま、ご興味のある方、ぜひご参加ください。

- ① 6 月 21 日開催『自然文化誌研究会（東京学芸大学冒険探検部）1975 年創立 50 周年記念座談会～学術探検と環境学習の創造～』 → ZOOM で開催します。
- ② 10 月 4 日開催 『自然文化誌研究会 50 周年記念の会』 → 東京学芸大学農園で開催します。
- ③ 50 周年記念誌の発行 → 冊子で発行します。

今回は順序の早い 6 月 21 日の開催についてご案内します。

## 自然文化誌研究会（東京学芸大学冒険探検部）1975 年創立 50 周年記念 座談会～学術探検と環境学習の創造～ （一次案内）

自然文化誌研究会（愛称学大探検部）は 1975 年に創立してから本年で 50 周年になります。私たちの研究会の歴史とその成果を振りかえる公開座談会「学術探検と環境学習の創造」を開催します。国内外での学術調査の成果を学習・教育方法論に応用して、日本環境教育学会、雑穀研究会の創立、エコミュージアム日本村などの地域振興活動、雑穀街道普及会なども進めてきました。教員養成を主目的とする大学探検部の特色として、子供向けの冒険学校とともに環境教育活動指導者養成も継続しています。

今までの大学探検部活動を支えてくださった多くの同好の皆さんに座談会にご参加いただき、現在までの到達地点をさらに越えていく未来を探りたいと思います。

日時：2025 年 6 月 21 日（土）、10：30～16：20 場所：ZOOM 100 人程度

第 1 部）10：30～12：30 『学術探検と学習・教育をつなぐ』

挨拶・司会；中込卓男（代表理事）

話題提供：

①木俣美樹男（専任研究員、博物館担当運営委員、東京学芸大学名誉教授）

学術探検の系譜～植物の栽培化過程と伝播＜フィールド・ワークの成果から＞

<https://www.milletimplic.net/university/inch50aniv/lecjunefin.pdf>

環境学習における心の構造と機能の文化的進化＜冒険学校の成果から＞

<https://www.milletimplic.net/university/inch50aniv/inchmindfin.pdf>

②日比野真士（毎日新聞社）

東京学芸大学探検部員の海外探検と探検セミナー

●第二部 13：00～14：30 『エコミュージアム日本村、雑穀街道普及会などの民族植物学的伝統知の継承・保全活動』

司会；井村礼恵（博物館担当運営委員、文教大学准教授）

話題提供：

①宮本透（博物館担当運営委員、宮本茶園）雑穀栽培講習会と雑穀街道の普及

②黒澤友彦（事務局長、木下養魚場）エコミュージアム日本村の実践活動

③井村礼恵（博物館担当運営委員、文教大学准教授）東京学芸大学との社会連携協定による地域振興活動

●第三部 14：30～16：00 『冒険学校、環境学習セミナーなどの実践活動による心の形成』

司会；西村俊（博物館担当理事、北陸先端科学技術大学院大学准教授）

話題提供；：

①中込卓男（代表理事）

②中込貴芳（副代表理事）

西原の民俗調査から冒険学校へ

タイ・日本自然クラブの合同キャンプ

③宮坂朋彦（冒険学校担当運営委員、東京学芸大学連合大学院生）

冒険学校と現代教育の思潮～教育哲学の視点から

10 月 4 日開催『自然文化誌研究会 50 周年記念の会』については次号で詳しくご案内します。事前に Google フォームで参加者の方に、思い出や近況報告などのコメントをお願いする予定です。農園での開催で第二部（15：00～）は交流会を予定しています。



2025年も引き続き、植物と人々の博物館の活動へのご理解とご協力をよろしくお願い致します。

冬の間は閉館し、春が来る頃まで民具・書籍の整理はお休みしていましたが、3月9日から徐々に再開（開館）し、さく葉標本の選別や民具・書籍の整理を行います。ご協力頂ける方があれば、曜日や日時は調整できますので是非ご協力ください。資料などの閲覧もご連絡を頂ければ日程調整をして随時ご案内します。

民族植物学ノート第18号を3月末に発行する予定です。電子出版ですのでホームページ上で閲覧ください。HP上の資料を頼りに、メディアからの問合せや個人で関心を持ってくださる方もおられます。お時間の許す時にppmusee 植物と人々の博物館HP (<http://www.ppmusee.org/>) にご訪問頂き、電子書籍、聞き書き、エコミュージアム日本村（藤農便り、タイの環境学習、冒険の便り）などのバックナンバーを振り返ると、新しい気付きの機会になるかもしれません。

**【木俣専従研究員が講演会や勉強会の講師として、いくつかの講座でお話されました（予定を含む）。】**

①講座『里山再生ボランティア入門』の講義予定（木俣研究員）

日時：2025年2月9日 木俣担当 自然文化誌研究会/植物と人々の博物館

「1970年代の檜原村の雑穀調査から～人間と穀物の共生、文化的進化を学ぶ」

場所：桧原村蘆倉、NPO 法人さとやま学校・東京 (<https://satoyama-gakkou.org/field/>)

② 新渡戸文化高校2年生探求学習

日時：2025年2月19日水曜日 14:00～17:00

話題：探求学習で、雑穀に関するインタビューを受ける

③次代の食と農をつくる会/講座 zoom

日時：2025年3月5日 19:00～20:30

話題：日本の雑穀の歴史、調理方法、魅力など

可能な範囲で、活動の広がり方や人々の連携の可能性について、活動を継続頂いています。

**【春に雑穀の播種・栽培を予定される方には、種子をお分けします（郵送します）。】**

雑穀の簡単な栽培や加工、調理法などは下記にまとめてあります。不明なことがありましたら、メールでお問い合わせ下さい。

栽培法 雑穀～とりあえずの栽培法 (<https://www.milletimplic.net/weedlife/methmilcult.pdf>)

在来雑穀の栽培・加工法 (<https://www.milletimplic.net/weedlife/farmsklec8p.pdf>)

加工法 雑穀類の加工・調理方法 (<https://www.milletimplic.net/weedlife/milfoodprc.pdf>)

※詳細は『日本雑穀のむら』『雑穀の民族植物学』を検索してお読みください。

## 「こすげ冒険学校」のご案内！！(募集予定)

小菅村の自然と文化を満喫しながら過ごす6泊7日の長期キャンプです。一緒に山と村の暮らしを探検する7日間です！

日程：8月2日（土）～8月8日（金）6泊7日

場所：小菅村 清水バンガロー（木下キャンプ場）

対象：小学校3年生～中学校3年生 25名

参加費：49,500円

申し込み方法（予定）：6月20日（金）必着（締め切り厳守になります）に事務局までをお申し込みください。参加者が定員を超えた場合は抽選になります。



まだ募集開始をしていません。5月の次号でご案内しますのでしばらくお待ちください。

黒澤東江（はるちゃん・小菅村在住）

3/1・2の土日で手前味噌作りを行いました。INCHの主催事業として毎年行っていた味噌づくりですが、コロナ禍だったり黒澤家の子育てだったりでなんとなく中止が続いておりました。その間、我が家では全国の美味しいお味噌食べようぜ選手権が開催され、四国に行った時に買った高知の味噌がとても美味しかったです。好みで言えば麦麴よりも甘みのある米麴、寝かせた古味噌よりも出来立ての若味噌が好きです。美味しいお味噌があったら教えてください。

話が逸れました。去年はわたしの実家で採れた大豆を使用して味噌を仕込みました。たった1kgだけでしたがなんかわくわくしたんですね。今思えば気持ちが味噌づくりに対して前向きになっていたのでしょうか。そんな中、2024年のまふゆのキャンプにて、佐々木さん(まーくん)が「今年はいいい大豆がたくさん採れたから味噌作りしようぜ！」と提案してくれました。いいね〜！となったものの、まだイベントにするには体力も気力もねえ・・・ってことでプレ味噌づくりとして今回は行いました。

以前まではわたしの実家で米麴を起こしていましたが、家庭の事情により麴は購入することになりました。今回は山梨県で有名な五味醤油さん(という名のお味噌屋さん)の米麴を購入しました。材料費はかかってしまうけれどきっと美味しいお味噌になるでしょう。

実家のお米は使わずとも大きな鉄釜は現役です(詳しくはまーくんのYoutubeで!)わたしのSOBO 芳子さんの嫁入り道具だったという重たい鉄釜。また使うことができるとてもうれしく思います。

というわけで、佐々木さん(まーくん)も乗り気なので来年からまた手前味噌づくりが復活する…かも知れません。材料に限りがあるので先着順になると思います。ご家族での参加も大歓迎です。今回は臼と杵で大豆を擦り潰しましたが、まだ杵が持てない子どもたちはジップロックに入れた豆を一生懸命踏んで潰してくれました。みんなで作ったお味噌、絶対に美味しいね^^興味のある方は会ったときに一言ください、開催に向けてモチベーションが上がるので！



佐々木正久さんのYouTube「まー君のナチュラルフ」で「味噌づくり」の当日の様子が観られます！！  
(チャンネル登録よろしくお願ひします)



## (感想)

変わったな、と思うのはどんなときだろう。佐々木さんにも、黒ちゃんはあるちゃんにも再会するのは6年ぶりだったが、変わったな、とは感じなかった。これからもそうだろうか。あるとき突然、変わったなと思うのだろうか。

「ぬるうと変わるんじゃない？」  
はるちゃんはそう言うけれども。



イケメン動画配信者「まー君」

味噌づくりのために、三月の小菅村を訪ねた。妻と子供三人、家族全員で来るのは初めてだ。しのさんの子たち（ゆうすけ君、けいすけ君）や村の子あかりちゃん、ずっと会いたかった竹晴君が出迎えてくれた。

長男は、特にゆうすけ君と仲良くなり、川で水切りを教わった。真ん中の娘はおっかなびっくりだが、4歳の男の子は果敢に川を渡り、崖をよじ登った。

カレーとヤマメ唐揚げの夕食を終えて、囲炉裏で酒を飲んだ。最近、Youtube で動画を見た竹晴君は、佐渡ヶ島に興味津々。銀マットの丸い焦げ跡を島に見立てて、ぼくに話しかけてくれた。

「まーしー、あのさ。これ、佐渡ヶ島だよ」  
「隣に点があるね。これは粟島だ」  
「まーしー、粟島は、どこにあるの」  
「佐渡ヶ島の右だよ。左なら、ただの岩だ」  
「たらい舟で行ける？」  
「それは無理かな」  
「まーしー、あのさ。まーしーは、羽根を付けたら舞うような鶏ガラだって、父ちゃんが言った」

「うん。お風呂に入ると、ラーメンのスープがで  
きるよ」

「まーしー、あのさ。……」

「……」

「……」



うちの子なおき（4歳）とたけちゃん

一人テントで寝て、佐々木さんが再び火をおこす音で眼を覚ました。ミソサザイの声。初めて、双眼鏡で鳴く姿を捉えることができた。

杵と臼で豆を潰して、塩と麴と混ぜる。びたん！びたん！と投げつけるように樽へ仕込んだ。納豆用の大豆が蒸されるのを待ちたいが、新潟へ帰るので早めに引き上げることにした。

これから豆が色づいて、いつの間にか味噌となる。変わるときは変わるのだ。その変化は惜しむものでもない。十キロの樽を抱えてキャンプ場の坂道を登って行くと、ずっしり、重たかった。



煙に負けるうちの子はるき（9歳）

（横山昌佳 新潟県より）

## 冒険学校は「学校」か？（後編）

「冒険の学校」から「学校の冒険」へ

宮坂朋彦（みややん・自然文化誌研究会 運営委員）

前編では、冒険学校が非学校的な側面を多分に持っていること、そしてその一方で、「学校」という言葉が、現代の「教育/学習の場」として当たり前前に浸透していることから、冒険学校もまた「学校的」な構造を持っていることを確認した。

### 3. 「冒険の学校」から「学校の冒険」へ

活動内容や体制に非学校的な要素を多分にはらみながらも、冒険学校が「学校」という名を冠していることは、どのような意味を持っているのか。前回確認したように、一つはもちろん、「冒険の学校」という意味があるだろう。それは冒険学校が、いかに非学校的に——あえて言えば「冒険的」に——見えたとしても、**冒険学校における私たちの行動には、知らず知らずのうちに、学校的な振る舞いが浸透している、**ということだ。

他方、より重要であると私が考えているもう一つの意味は、さしあたり「学校の冒険」とでも言うべきものである。

これは、ただ単に「学校以外の場」としてオルタナティブな学びの場をつくる、ということではない。「学校の冒険」という言葉で私が意味しているのは、冒険学校が学校という名を冠していることそれ自体が、わたしたちの中に浸透している「学校」という言葉の意味そのものを揺るがしていく可能性を秘めているということだ。言い換えれば、**冒険学校の活動において、わたしたちの中にある「学校」の観念そのものが「冒険」にさらされるような事態である。**

少し個人的な話をしよう。

私自身は、大学一年生のころ初めて冒険学校に参加した。いまでこそ教育哲学の研究を仕事にしたいと考えているが、当時は純粋に教員を目指していた。そんな私にとって、冒険学校が持つ非学校性——大人たちの自由奔放さ、子どもに対する制約の少なさ——は、「学校」や「教育」のあり方そのものに対する見方を変えるものであった。

この印象は、その年に同じく子どもの野外活動を中心とする別のNPO（2019年に50周年を迎えた、筑波大ルーツの老舗である）でスタッフを経験したことでより強まった。そちらのキャンプも非常に勉強になったし良い体験ではあったのだが、冒険学校と比べるとあれば、よほど「学校的」であった。子どもたちは班に分けられ、就寝や起床は一律（ラップで起こされる）、キャンプ場の掃除なども含め、プログラムは固定。スタッフは教員が忙しすぎて寝る暇もない、というところまで、まさに「学校的」であった。

目指すところが本会とは異なるので、どちらが良いということではないのだが、いわばそのキャンプは私が知る「学校的」な教育の延長線上に位置していたのである。そしてそれと比べたとき、INCHの冒険学校は、大袈裟に言えば「学校教育」というものの捉え方自体を揺さぶる、魅力的なものに感じられたのだ。

どれだけ自覚的かはわからないが、スタッフたちのなかにこうした印象を持っている人はいるのではないだろうか。例えば、元参加者の立場から現在スタッフとして冒険学校に参画している人の多くは、一般的な意味での「学校教育」とは異なる教育への期待を、「冒険学校」のなかに見出してきているように思われる。東京学芸大学関係のスタッフたちと異なり、彼らの多くがその後のキャリアとして「学校」に携わるわけではないことから、冒険学校における彼らの「非学校性」は顕著である。

他方で、普段は学校教育に従事している現役教員スタッフたちもまた、INCHの活動においては少し変わった角度から教育/学習を見つめなおし、再び日常の学校教育にそれを反映させているのではないだろうか。そ

これは、単に冒険学校の経験が現場でも役立った、という表面的な効果にとどまるものではなく、どこかもう少し深い部分での、ただし気が付きにくい変化の積み重ねなのではないかと思われる。

(特にベテランスタッフたちは、学校にいながらにしていくだけでも「冒険」が可能であることを体現しているように感じられる)

つまり、「学校の冒険」とは、非学校的な学校である冒険学校との関わりを通して、参加者、スタッフ、保護者、地域住民のなかにある「学校」(教育/学習)のあり方そのものが捉え直されていく、というポジティブな可能性を指しているのである。

このように見るのであれば、冒険学校が学校の名を冠していることは、それが学校的なものに縛られているというネガティブな意味にとどまるものではない。それはむしろ、より広い射程へとその実践的意義を広げていくきっかけとさえ言えるだろう。

冒険学校は「冒険の学校」であるとともに、それぞれが持つ「学校」のあり方そのものを「冒険」へと開く場所なのである。

## おわりに

最後に一つ付け加えておきたいのは、この「学校の冒険」としての冒険学校が可能であるためには条件があるということだ。

それは、スタッフや運営側の少なくとも一部が、冒険学校が孕む「学校的な要素」と「非学校的な要素」に自覚的であること、すなわち、「冒険の学校」としての冒険学校のあり方——「学校の冒険」ではなく——に自覚的であることである。(あえて「学校の冒険」という違和感を強調する言い回しを選んだ理由の一つは、こうした自覚のための印象付けでもある)。

人々が「自粛」の「要請」を次第に受け入れていったように、一見矛盾するにもかかわらずそれを無意識に受け入れることができるのは、それが本来持っている言葉の意味や意義が、自明化し、透明化していくからである。

自らの行動が「学校的か否か」すらわからなくなるほど、「学校的なもの」は私たちの日常に深く浸透している。それはときに、学校的な仕組みが生み出している問題やその原因が「当たり前すぎて見えない」という事態を引き起こしてしまいかねない。重要なのは、冒険学校の「学校的」要素が良いか悪いか、という個別の問題ではなく、いかに私たちがそれに対して無自覚か、という点である。

私が教育哲学を学んでいる理由の一端もここにある。No.156掲載の予告編で、私は「教育哲学」の仕事を「当たり前を疑う」ことだと述べた。そう、まさにこうした自覚のための方法としてこそ、教育哲学が力を発揮するのである。

(次回からは、「冒険学校」の「冒険」の側面について、絵本を例とする「生成の学び」という観点から考えてみる予定)



(図 1) 個人テントの導入をはじめ、コロナ禍以降はいくらも「学校的」とも言える制約を設けざるを得なくなった。それが良いか悪いかはともかく、「当たり前」として受け入れてしまう限り、そこに問題があっても気がつくことはできない。

# 『野草の天ぷらとお茶つみの会』

## 4.20 予定 (デイキャンプ)

**お茶つみをして、その場で野草の天ぷらを揚げて食す予定です。**

恒例の「野草の天ぷらとお茶つみの会」のデイキャンプです。普段は「葉っぱ」「雑草」として見落としがちな野草でも食べられるものがたくさんあります。また、自分たちでお茶をつみ、蒸して、揉んで、製茶します。野草の講師は樹木医の岩谷美苗さん、お茶づくりの講師は宮本農園の宮本透さんです。

日時：4月20日(日) 9:30~14:30

場所：東京学芸大学 環境教育研究センター (農場)

対象：どなたでもご参加ください

参加費：中学生以下：300円 高校生以上：500円

※帽子、飲み物、昼食をご持参をお願いします

●お茶が完成するまでに間延びする時間がありますがのんびりと楽しみながらよろしくお願いします。

●昨年は90名を超える多くのみなさまにお申し込みをいただきました。それぞれの調理や作業については、協力しながら、譲り合いながら、積極的に、お茶づくりと野草の天ぷらを楽しんでください。

●農園は日影が少ないので帽子の持参をお願いします。また、農園はやぶ蚊もいますので、長袖シャツと長ズボン長靴下の着用、虫よけの対策をお勧めします。



※子どもたちの安全管理は保護者の方をお願いします。

※当日はコチラで保険を掛けませんのでご承知おき下さい。

※参加希望の方は4月15日までに事務局あてにメールかLINEをください(参加者全員の氏名・住所・TEL・年齢(学年)を記載)。npo\_inch@yahoo.co.jp **☞昨年申し込みいただいた方は代表者名と人数だけでOKです。**

### ○ 新理事の挨拶 菱井優介 (ひしいゆうすけ)

お久しぶりの方も、初めましての方も、よろしくお願いします。元事務局の菱井です。

INCHとの関わりは、25年前、Q(佐川)から誘われ、農園で働くヤス(小川)と出会ったのがはじまり。当時は秩父から小菅村に活動拠点を移すまでの空白期。木俣先生に声をかけてもらい、有志で農学校を立ち上げ、俊(西村)や多くの仲間とちえのわを設立。事務局となり、小菅村で黒(澤)と同居して、と。私の20代はINCHなしでは語れません。

50周年を機にこの数奇な縁をより深く広くつなげていくために取り組んでいきます。

### ○ 自然文化誌研究会 一緒に活動しませんか?

略称INCH(インチ)。冒険・伝承・創造をキーワードに『国際的な視野で人間をとりまく自然と文化を野外において探求する野外環境教育のパイオニア』として、40年以上にわたって活動を続けています。2004年からNPOとして再出発し、活動の中心を山梨県小菅村に移し、子どもを対象とした『冒険学校』や市民を対象とした『のびと講座』『ELF環境学習中堅指導者養成講座(のびと研修会)』などの山村の自然や文化を学ぶ活動を通じて、持続可能な社会を形成していく上で必須である環境学習の実践と農山村の振興を実現させるため、エコミュージアムづくりを行っています。本会の運営は会員の皆様のご協力と、会費で成り立っています。ぜひとも会員の輪を広げていき、納入をお願い致します。本会の趣旨に賛同いただける方なら、どなたでも会員になれます。なお、正会員のみが総会における議決権を持ちます。それ以外の会員は、総会にオブザーバー参加となります。会費は

年額(1~12月)です。また、皆様からのご寄付も募っております。

正会員：10,000円 一般会員：5,000円 学生会員：3,000円

賛助会員(個人・団体)：10,000円 家族会員：6,000円

植物と人々の博物館友の会会員：3,000円

雑穀街道特別会員：1口1,000円から

・成合基金(冒険探検基金)：「成合基金」とご記載してください。

・寄付：「寄付」とご記載してください。

①郵便振替口座：00100-2-665768

口座名：特定非営利活動法人自然文化誌研究会

②ゆうちょ銀行：店名00八 普通口座

口座番号 9479450

口座名：特定非営利活動法人自然文化誌研究会



ナチュラ 158号

特定非営利活動法人 自然文化誌研究会 会報誌

<発行日>2025年3月20日

<編集>自然文化誌研究会 事務局

<発行> 特定非営利活動法人

**自然文化誌研究会**

The Institute of Natural and Cultural History

<事務局>〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村3337-2

TEL:090-3334-5328(事務局 黒澤)

E-mail: npo\_inch@yahoo.co.jp

H P: <http://www.npo-inch.ppmusee.org/index.html>